

報告

## 特別支援教育における 学習支援ボランティア学生と派遣校教師との連絡体制について ～特別支援コーディネータの立場から～

山本真由美

徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部

要約：徳島市、徳島県の特別支援教育への支援事業の一環として大学生を学習支援ボランティアとして小学校や中学校に派遣する事業を開始して6年目を迎えている。その中で、特に両者の連絡体制に課題があることが判明してきた。本調査では、ボランティア学生と派遣校とのパイプ役であることが多い特別支援教育コーディネータを対象として質問紙調査を実施し、ボランティア学生との連絡体制、支援体制についての問題点と解決方法について明らかにすることを目的とした。次の結果が得られた。ボランティア学生の指導を行っているコーディネータは約半数であった。ボランティア学生への指導はボランティア学生との話し合いが有効と考えているが、コーディネータの業務が多く、打ち合わせ時間が不足している。連絡記録表はその補助手段として有効である。

(キーワード：特別支援教育、学生ボランティア、特別支援教育コーディネータ、連絡体制、連絡記録表)

### The contact system between learning support volunteers and the teachers of schools at special needs education - from the position of coordinator of special needs education -

Mayumi YAMAMOTO

Institute of Socio-Arts and Sciences, The University of Tokushima

Abstract : Six years have passed since we started the project to dispatch learning support volunteer students to elementary and middle schools as part of its assistance to special education in Tokushima Prefecture and Tokushima city. In this report we investigated the problem of the contact system between learning support volunteers and school teachers. The method was a questionnaire. The participants were special education coordinators. The results obtained were as follows: Half of them gave guidance to the students. They thought that a valid guidance to learning support volunteers students was having discussion with them, but meeting time fell short because of the many activities of special education coordinators. Tables to contact and record proved useful as supplementary means.

(Keywords: Special needs education, Learning support volunteers, Coordinator of special needs education, Contact system, Table to contact and record)

#### はじめに

特別支援教育への支援事業の一環として、徳島市教育委員会や徳島県教育委員会と連携し、大学生(以下、大学院生を含む)を学習支援ボランティアとして小学校や中学校に派遣する事業を開始して6年目を迎えている。

特別支援教育に関しては、2007年4月から「学校教育法の一部改正」により新しい法律が施行され、新しい体制が敷かれることになった。この改正法では、小中学校の通常学級においても障害のある児童生徒が在籍していることが明記され、彼らのための支援体制を取ることを前提としている。特別支援教育の方向として、すべての子ども

が通常学級に在籍し、この学級での学習や活動を中心としながら、特別な教育的ニーズを補償するためにさまざまな支援をするという取り組みを目指すことになる。そのような状況において、現在、通常学級に注意欠陥・多動性障害、自閉症、学習障害といった発達障害の子どもが在籍している。原則40人一学級制の中で、学級担任が、すべての特別な教育的ニーズのある子どもの指導と学級全体の運営を行って行くことは物理的に難しい。

そこで、各自治体は、特別支援教育へのさまざまな支援事業を展開している<sup>1), 2), 3), 5), 6)</sup>。大学生をボランティアとしてニーズのある小中学校に派遣する事業もその一環である。

この事業に対する評価は概ね肯定的であり、期待もある<sup>8)</sup>が、派遣される大学生側と派遣校側のニーズ調査結果から課題が見出されている。大学生からは学校現場において、「何をどこまでして良いのか分からない」や「教員との反省会や打ち合わせがないことが不安」等、ボランティアとしての役割や派遣校との連携に関する不安のあったことが浮き彫りになり、派遣校教師からは「派遣されるボランティアの具体的な活用方法が分からなかった」や「派遣される学生個々の特別支援教育や教育的な知識の習得度合い等、ボランティア要員の個々の情報が欲しい」などの意見が見られた。山本・津島<sup>9)</sup>は、学習支援ボランティア学生を対象としてボランティア活動に関する実態調査を実施した。その結果、教員との打ち合わせがあると回答したのは、小学校では46.9%、中学校では88.9%であり、派遣校種間で差があった。その打ち合わせ時間は、5~10分間であった。このように、活動自体への課題は見られないものの、実際活用していく中での課題があることが明らかになった。野津・石田<sup>5)</sup>も学校側から「子どもの指導・支援方法についての打合せ時間を十分に確保できなかった」という意見があったと報告している。渡部・金山・武藤<sup>7)</sup>はコミュニケーション・カード(連絡記録表と同様の機能を担うもの)を使用することで、担任からのコメントが向上したと報告している。本派遣事業でも、徳島市教育委員会と協力して渡部・金山・武藤<sup>7)</sup>のコミュニケーション・カードを基にボランティア学生と派遣校教師との連絡を行う目的で連絡記録表を作成し、2009年度から使用している。連絡記録表については、7割弱のボランティア学生が指導教師から返事があり、記載した内容が支援に活かされていると回答している<sup>9)</sup>。

そこで、本報告では、ボランティア学生と派遣校とのパイプ役であることが多い特別支援教育コーディネータを対象として質問紙調査を実施し、ボランティア学生と派遣校教師との連絡体制についての問題点を知り、解決方法について考察し、今後の学習支援ボランティア活動に役立つ資料とすることを目的とした。

## 方法

### 1. 研究協力者

#### (1) 特別支援教育コーディネータ教師

徳島市内の小学校20校、中学校9校に勤務するそれぞれ20名、9名であった。

#### (2) 調査方法

質問紙調査法を用いた。

#### (3) 調査実施日

2010年10月7日であった。

#### (4) 調査用紙の配布回収方法

特別支援教育コーディネータ教師に対して徳島市教育研究所が実施する研修会において、質問紙調査用紙を配付し、その場で調査協力を依頼した。研修会終了後に同調査用紙を回収した。

#### (5) 統計分析法

選択回答は、SPSS16.0で分析を行い、自由記述内容はWordMiner(日本電子計算株式会社, 2000-2003)を用いて、テキストマイニング分析を行った。WordMinerはテキスト型データの探索的データ解析を行うものである。

## 結果と考察

### 1. 回答者の属性

#### (1) 回収率

小学校80%、中学校77.8%、全体で79.3%であった。その属性は表1に示す通りである。小学校では女性が、中学校では男性がコーディネータになっている割合が高いと言える。

表1 派遣校種別性別年齢別人数内訳

		小学校	中学校
男性	40歳代	2	4
	50歳代	0	1
女性	30歳代	2	0
	40歳代	7	0
	50歳代	5	2
合計		16	7

#### (2) コーディネータ歴

派遣校種別のコーディネータ歴別人数内訳は表2に示す通りである。

表2 派遣校種別のコーディネータ歴別人数内訳

	小学校	中学校
1年目	4	2
2年目	1	1
3年目	4	1
4年目	4	1
5年目	2	1
6年目	1	0
8年目	0	1

(3) コーディネータ職と他職との兼務

コーディネータ職は、専属か兼務かを尋ねたところ、95.7%が兼務であった。兼務の職は、通常学級担任、通級指導教室担任、特別支援学級担任、教務主任、学年主任、特別支援学級主任、生徒指導主事（主任）、TT担当、初任者研修担当、巡回相談員などであり、複数担当していることが明らかとなった。兼務の業務があることで「困ることがある」と回答したのが78.3%であった。その内容として、小学校では、「コーディネータの役割が十分果たせない」、「支援が必要なすべての子どもをみる時間がない」、「他の教師から相談や観察依頼があっても時間が取れない」、「保護者からの相談依頼があっても時間が取れない」などであった。中学校では、「コーディネータの役割が十分果たせない」、「支援が必要なすべての子どもをみる時間がない」のほか、「コーディネータとしての素質が備わっていないように感じる」という記載があった。

2. ボランティア学生について

(1) ボランティア学生への指導の必要性

91.3%が必要であると回答している。その内容は「支援内容の指導」、「支援方法の指導」、「要支援児童生徒への対応方法」のほか、中学校で「発達障害特性の理解」という記述があった。実際に指導を行っているのは、52.2%であった。コーディネータ以外で指導している職は、小学校では、「副校長・教頭」、「学級担任」、「教科担当」、「特別支援学級主任」、「他のコーディネータ」など

であった。中学校では、「別の特別支援学級担任」、「現在はボランティア学生がいらない」などであった。

(2) ボランティア学生との打ち合わせ

打ち合わせが必要と考えているのは82.6%であった。その中で実際に打ち合わせができているのは21.0%であった。打ち合わせが出来ない理由として、ボランティア学生と時間が合わないという回答は26.7%、業務が多く時間が確保できないという回答は80%であった。戸ヶ崎・酒井・溝邊<sup>6)</sup>によれば、反省会等を行っていた学校と行っていなかった学校では、毎回反省会等を行っていた学校の方が「来年も学生支援員を活用したい」と思っており、ボランティア学生である学生支援員においても、次の支援日や時間の予定に関する打ち合わせの有無が、学生支援員としての活動のしやすさや次年度の継続意欲と強く関係していた。また、学生支援員と連携が取れていた学校の方が、概ね学生支援員を有益であると感じていた。

(3) ボランティア学生との連絡体制について

1) 連絡記録表の周知率と利用率

連絡記録表の存在を知っているのが69.6%であった。その中で連絡記録表を用いて連絡を取り合っているのが68.8%、そのうち連絡記録表が役立っていると回答したのが100%であった。どのように役立っているかについてテキストマイニング分析を行った。自由記述内容に対して分かち書き分析を行い、派遣校種別・性別・年齢別で構成要素の説明率の高い順に第1次元を横軸、第2次元を縦軸としてプロットしたのが、図1である。小学校では、男性40歳代は「口頭で、毎朝ミーティングはしているが、活動中のふりかえり、連絡事項の確認、ミーティングの内容が徹底しやすいため」と記入している。女性30歳代は「1日のスケジュールや、お願いすることを記入しているので、少ない打ち合わせで連絡可能であるため」、40歳代は「打ち合わせをする時間がほとんど取れないので、(連絡)記録表を使って連絡等を行うことができる」、50歳代は「担任が気がつかなくったところを書いてくれたり、ボランティア学生の悩ん

でいるところについてコメントを書いたりすることができるから。コーディネータは話す間がない時もあるから」と記入している。中学校では、男性40歳代は「連絡記録表があれば直接話ができない時に大変役立っている。現場ではゆっくり話す時間が取れない」、「FACE TO FACEで話す時間の方が大切」、女性50歳代は「授業終了後に担当の教師に記入をお願いします」と記入している。つまり、直接対面で話をする方がよいが、ボランティア学生との打ち合わせ時間を十分確保することができないため、あるいは打ち合わせ内容を徹底させるため、連絡記録表を利用していると言える。

表3 派遣校種別便利な連絡記録表様式

	小学校	中学校
資料A	6	4
資料B	1	1
資料C	3	1
資料D	0	1
資料E	3	1
資料F	0	2
資料G	1	2
資料H	1	2

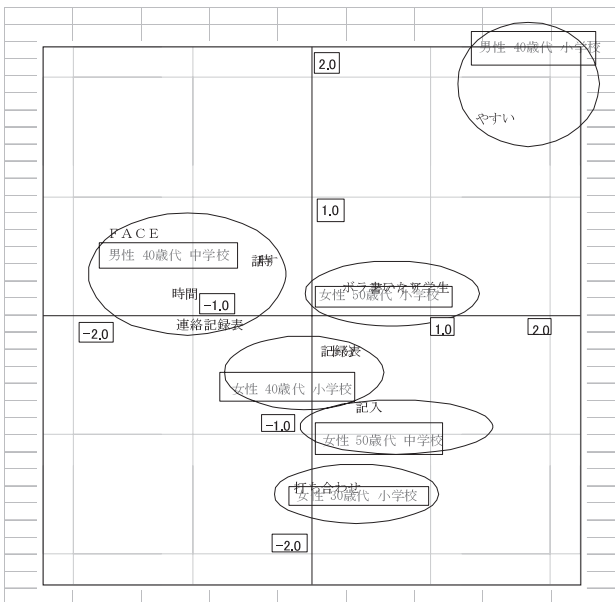


図1 派遣校教師の年齢別性別の連絡記録表に対する意識

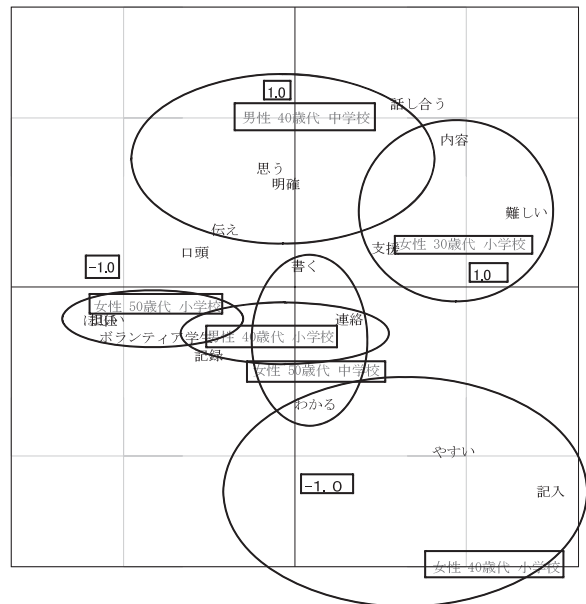


図2 派遣校教師の年齢別性別の連絡記録表様式選択理由

2) 連絡記録表の様式 (附表参照)

連絡記録表は渡部・金山・武藤<sup>7)</sup>を参考に著者と市教委で利用を決めたものである。2009年度に各学校で使用されていた8種類の様式を提示し、使いやすさについて複数回答で尋ねた(表3)。それぞれを選んだ理由についてテキストマイニング分析をおこなった。自由記述内容に対して分かち書き分析を行い、派遣校種別・性別・年齢別で構成要素の説明率の高い順に第1次元を横軸、第2次元を縦軸としてプロットしたのが、図2である。

小学校では、男性40歳代は「学生の記録、スーパーバイザーの記録が分かれており、レイアウトが、パッと見たときに、わかりやすい」とあり、女性30歳代「たくさん書くことは、日常業務の中で非常に難しいため」、女性40歳代「昨年度使用したが、時間をかけず記入することができたから」、女性50歳代「問題点が1目でわかりやすい」、女性50歳代「支援クラスの担任によって、してほしいことがちがうので、直接ボランティア学生さんが担任に、何をしたらよいか聞いてほしい。コーディネータにはわからない」などと書かれている。中学校では、女性50歳代で「書きやすくわかりやすい」などが

あった。時間を掛けずに書きやすく、課題がわかりやすいような様式を希望していると言える。

#### (4) ボランティア学生への指導体制

ボランティア学生への指導としてどのような体制が考えられるかを複数回答で尋ねた。小学校では、校内情報交換会の開催(16.7%)、教育研究所開催の研修会(27.8%)、派遣大学で指導(33.3%)などであった。中学校では、校内情報交換会の開催(50%)、教育研究所開催の研修会(33.3%)、派遣大学で指導(16.7%)などであった。その他では、「支援の内容や方法をできるだけ伝えようとしてはいるが、十分実践につながらない方の場合現場としては苦しい」、「現場での支援は多種多様で、子どもによっても異なるので、知識の上に、その子にあった支援の仕方を伝えていく時間の確保がほしい。学生に子どものプライバシーをどこまで伝えてよいか、悩む時がある」、「コーディネータ(ボランティア担当)の所に寄ってもらって話し合った年もあり、その年は充実した支援ができたように思う」、「(派遣大学で指導の際)コーディネータも必ず共に参加して、研修を受けたい」などがあった。小学校では外部での指導を、中学校では校内での指導を望んでいるようである。

指導大学での指導体制として松尾・杉村<sup>4)</sup>は、学内でボランティア学生に学習支援ボランティア活動後に振り返りとフィードバックを行った群の方が、過去の学習支援体験と関連づけて多様な視点から推論し、理解を深めていたと報告し、学内での指導の重要性を指摘している。

#### まとめと今後の課題

本報告では、特別支援教育コーディネータを対象として派遣校の立場からボランティア学生との打ち合わせ、連絡体制、指導体制について質問紙調査法を用いて明らかにすることを目的とした。

今回の調査では、ボランティア学生への指導や打ち合わせは必要であるが、打ち合わせができていないという実態が浮かび上がってきた。その理由として、業務が多いので時間が確保できないというものであった。特別支援教育コーディネータ

職はほとんどが兼務であることが関係していると言える。その中で連絡記録表を活用しているのが、約7割であった。特別支援教育コーディネータは、ボランティア学生と直接話ができない時に利用していることが明らかとなった。利用しやすい様式は、時間を掛けずに書きやすく、課題がわかりやすいものであった。

また、派遣校からは、ボランティア学生が派遣期間途中で「自分が考えていたイメージと違う」、「指導の教師と合わない」などの理由で活動を中止して困るという報告もある。ボランティア学生への指導体制として、「校内情報交換会」、「教育研究所開催の研修会」、「派遣大学での指導」などがある。

今後は、ボランティア学生の指導を行っている教師に調査対象の範囲を広げ、特別支援教育の質と量の充実をさらに図るためにボランティア学生に対する指導体制、連絡体制について検討していきたい。

#### 参考文献

- 1) 兵庫県教育委員会：2006、兵庫の特別支援教育 <http://www.hyogo-c.ed.jp/~sho-bo/21hyogonotokube.pdf> , 2009. 9. 17.
- 2) 神戸市小学校長会：続 変容する子どもたち、みるめ書房、2004.
- 3) 京都市教育委員会：2008 総合育成支援員の募集 <http://www.city.kyoto.lg.jp/kyoiku/page/0000057947.html> , 2009. 9. 17.
- 4) 松尾 剛・杉村智子：学習支援ボランティアにおける学生の学びを促すカンファレンス構造の検討 ～事後の振り返りとフィードバックに注目して～、教育実践研究, 18, 119-126, 2009.
- 5) 野津吉宏・石田耕一：「大学性による学習支援ボランティア(アシスタントティーチャー)事業」の成果と課題、埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 8, 61-69, 2009.
- 6) 戸ヶ崎泰子・酒井祐市・溝邊由美子：小中学校の特別支援教育における学生支援員活用の試み、宮崎大学教育文化学部紀要, 教育科学, 19, 135-146, 2008.
- 7) 渡部太郎・金山好美・武藤崇：通常学級の担任

教師と教員補助者のコミュニケーション・カードの改善による担任教師からのコメントの増大, 行動分析学研究, 22, 39-48, 2008.

- 8) 山本真由美・瀬部あゆみ・島 治伸: 学生ボランティアに対する派遣校教師の評価, 徳島大学総合科学部人間科学研究, 17, 109-128, 2009.
- 9) 山本真由美・津島知彦: 学習支援ボランティアの派遣校に対する評価, 徳島大学総合科学部人間科学研究, 18, 87-103, 2010.

【附表】

<b>【A-小】</b>					
学習支援ボランティア連絡記録表小学校例		( )月( )日( )曜日		ボランティア氏名( )	
「今日の活動」と「記号」だけ担当者が記入します。それ以外は、ボランティアが記入します。					
記号例: ○その支援を続けてください ☆引き続き注意して見てください ?説明してください					
今日の活動					
	教科	気がついたこと・支援したこと	記号	良かったこと	記号
朝の時間					
1時間目					
年 組					
2時間目					
年 組					
業間休み					
3時間目					
年 組					
4時間目					
年 組					
給食・昼休み					
5時間目					
年 組					
6時間目					
年 組					
放課後					
その他					

**【A-中】**

学習支援ボランティア連絡記録表中学校例		( )月( )日( )曜日		ボランティア氏名( )	
「今日の活動」と「記号」だけ担当者が記入します。それ以外は、ボランティアが記入します。					
記号例: ○その支援を続けてください ☆引き続き注意して見てください ?説明してください					
今日の活動					
	教科	気がついたこと・支援したこと	記号	良かったこと	記号
朝の時間					
1時間目					
年 組					
2時間目					
年 組					
業間休み					
3時間目					
年 組					
4時間目					
年 組					
給食・昼休み					
5時間目					
年 組					
6時間目					
年 組					
放課後					
その他					

<b>【B】</b>				
学習ボランティア連絡記録表		( )月( )日( )曜日		
太枠の中は担任の先生お書きください。		ボランティア氏名( )		
	教科	してほしい支援	支援の中でよかったこと	支援の中で困ったこと
1時間目				
( )年( )組				
2時間目				
( )年( )組				
20分休み				
( )年( )組				
3時間目				
( )年( )組				
4時間目				
( )年( )組				
給食				
( )年( )組				
昼休み・そうじ				
( )年( )組				
その他				

<b>【D】</b>		
学習支援ボランティア(特別支援教育)連絡記録表(小学校用)		
		ボランティア氏名( )
月 日 曜日		
	担当教員の支援してほしいこと	支援内容・気がついたこと・質問
1時間目	教科( )	
	単元名( )	
年 組		
2時間目	教科( )	
	単元名( )	
年 組		
3時間目	教科( )	
	単元名( )	
年 組		
4時間目	教科( )	
	単元名( )	
年 組		
給食・昼休み		
年 組		
清掃		
年 組		
ボランティアより		
担任より		
1年		
2年		
3年		
コーディネーターより		

学習支援ボランティア連絡記録表			
		( )月( )日( )曜日	
	教科	具体的な支援の内容	気がついたこと・よかったこと
<b>【C】</b>	朝の時間		
	1時間目		
	2時間目		
	休み時間		
	3時間目		
	4時間目		
	給食/昼休み		
	5時間目		
担任・コーディネーターより			



【E】		
学習支援ボランティア（特別支援教育）連絡記録表（小学校用）		
		ボランティア氏名( )
月 日 曜日		
	担当教員の支援して欲しいこと	ボランティアの支援内容・質問
1時間目 年 組	教科( )単元名( )	
2時間目 年 組	教科( )単元名( )	
業間休み		
3時間目 年 組	教科( )単元名( )	
4時間目 年 組	教科( )単元名( )	
給食・昼休み		
5時間目 年 組	教科( )単元名( )	
6時間目 年 組	教科( )単元名( )	
放課後		
コーディネーターより		
担任より		

【F】	
学習支援ボランティア連絡記録表	
ボランティア氏名	
月 日 曜日	
ボランティアの支援内容	
1時間目 年 組	教科( )
2時間目 年 組	教科( )
3時間目 年 組	教科( )
4時間目 年 組	教科( )
給食・昼休み 年 組	
5時間目 年 組	教科( )
6時間目 年 組	教科( )
放課後	
コーディネーターより	
担任より	

【G】						
学習支援ボランティア連絡記録表						
				( )月( )日( )曜日		
				ボランティア氏名( )		
「今日の活動」と「記号」だけ担当者が記入します。それ以外は、ボランティアが記入します。						
記号例: ◎その支援を続けてください ○引き続き注意してみてください △支援の仕方を変えましょう ? 説明してください						
時間	教科	今日の活動	支援したこと	記号	気づいたこと 等	記号
朝の活動 ( )年						
1時間目 ( )年						
2時間目 ( )年						
業間休み ( )年						
3時間目 ( )年						
4時間目 ( )年						
給食・昼休み ( )年						
5時間目 ( )年						
6時間目 ( )年						
放課後 ( )年						
その他						

【H】			
学習支援ボランティア連絡記録表			
( )月( )日( )曜日			
学級	教科	気がついたこと・支援したこと・良かったことなど	記号
1時間目 組			
2時間目 組			
3時間目 組			
4時間目 組			
給食 組			
★ 学級、教科、記号は学年担当で記入をお願いします。(月曜夕方までをお願いします)			
記号	○	その支援を続けてください	
	△	引き続き注意して見てください	
	?	説明してください	